

**日本研究所主催講演会「世界の中の日本 第六回」  
要旨 ドイツにおける伊万里焼の収集と磁器陳列室  
の流行 神聖ローマ帝国諸侯の事例**

著者	櫻庭 美咲
雑誌名	神田外語大学日本研究所紀要
号	11
ページ	133-138
発行年	2019-03-30
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1092/00001582/">http://id.nii.ac.jp/1092/00001582/</a>

# ドイツにおける伊万里焼の収集と磁器陳列室の流行

—— 神聖ローマ帝国諸侯の事例

櫻庭 美咲

## 1 伊万里焼の誕生と貿易の開始

磁器の生産は中国で六世紀にはじまり、一四世紀に朝鮮へ伝わったとされる。日本で最初に磁器が焼かれたのは一六〇〇年代、有田においてであった。技術は朝鮮出身の陶工により伝えられた。泉山で良質な陶石が豊富に見えられ、以来、有田の磁器生産は増加。磁器生産は四〇年代に飛躍的に成長した。その頃、中国では明末清初の乱により、公式ルートでの磁器輸出が停止。これを受けて一七世紀中頃以降、オランダや唐船の貿易商人による輸出用磁器の注文の波が有田に到来する。

## 2 西洋へ輸出された伊万里焼色絵のデザイン…柿右衛門様式と金襴手様式

有田における西洋向け磁器の生産は、芙蓉手を中心とする染付から開始された。その後多彩な色絵具で描いた色絵磁器の輸出が始まると、柿右衛門様式と金襴手様式という二つの色絵のデザインが西洋宮廷で流行の中心となる。

柿右衛門様式磁器の第一の特徴は、「乳白手」「濁手」<sup>にじみ</sup>などと呼ばれる薄く上質な素地の色である。一七世紀後期の作品にみられる絵付けは様式化され絵画性が高い。非総称の美と称される、余白が広く白い素地や安定した釉薬の美しさを生かしたデザインであった。柿右衛門様式磁器は主に西洋への輸出向けに製作された。日本向けに製作され日本に伝世する柿右衛門様式磁器は極めて少ない。家財目録から一七・一八世紀の来歴を立証できるのは、例えばドイツでは、ザクセン

のフリードリッヒ・アウグスト一世、ヘッセン選帝侯家、バイエルン選帝侯家、イギリスのエクセター伯爵家（バーリーハウス）、オランダのファン・ワッゼナール家（トウヴィツケル城）やフランスのコンデ公の旧蔵品などがあり、古い来歴をもつ柿右衛門様式磁器の優品は西欧に偏在している。

一七世紀末〜一八世紀前半には、柿右衛門様式に代わり金襴手様式が流行の中心となった。金襴手様式磁器の、文様で全体を濃密に埋め尽くすパロッキ的とも称される構成の絵付は、染付に赤と金を主体とするものであった。三〇センチを超える大作がほとんどない柿右衛門様式磁器に対し、金襴手様式磁器では六〇センチを超える大型の製品も少なくない。こうした大型の作品は、広大な宮殿の装飾にふさわしいスケールをもつものといえよう。現在でも東欧・西欧を問わず多くの西洋諸国の城館に、金襴手様式磁器の伝世品がみとめられる。

### 3 一六〜一七世紀、西洋の珍品コレクションから日本工芸の輸出、磁器陳列室の誕生へ

最も早く磁器を産した中国からは、一六世紀より主としてポルトガル船によって磁器が西洋へ輸出された。一六〜一七世紀の西洋では、磁器が「白い金」とも呼ばれ宝石のように高い値段で取引される。やがて、「curiosité 珍品」と呼ばれ

た異国の品々とともに陳列され、鑑賞されるようになる。珍品を披露するための陳列室は、驚異の部屋を意味する「ヴァンダーカンマー」、や「キャビネ・ド・キュリオシテ」、「クンストカンマー」などと呼ばれた。一七世紀後半からは、これに日本からの伊万里焼も加わることになる。伊万里焼の収集は、こうした陳列室の伝統を継承するものであった。

そのため磁器は、最初はクンスト・カンマーの珍品の一部として鑑賞されたが、その後、コレクションの規模が拡大すると、室内の壁面をすべて磁器で飾る発想が生まれた。一六三〇年代には、オランダのハーグの宮廷に東洋の磁器を壁面に陳列した「磁器陳列室」という特殊なインテリアデザインが考案された。磁器陳列室とは、壁面にコンソールと呼ばれる小さな棚を多数取りつけ、その上に磁器を配する構造をもった特殊なしつらえの部屋を指す。最も早い時期の注目すべき事例として、オランダのウイレム一世の妃リイズ・ド・コリニーやオランダ総督フレデリック・ヘンドリック・ファン・オラニエ・ナッソウの妃アマリア・ファン・ソルムス・ブラウンフェルスが、ハーグのノルドエインデ宮殿アウデ・ホーフに設置した磁器陳列室が知られている。

#### 4 一八世紀ドイツにおける磁器陳列室の発展

その後、オラニエ・ナッソウ家の娘の多くがドイツへ嫁ぎ、その東洋趣味の文化はドイツへ伝えられた。本格的な磁器陳列室を考案したオラニエ・ナッソウ家出身の女性との血縁を結んだ王侯がドイツに偏在したことにより、ドイツでは、西洋で最も多く磁器陳列室が設置されることになった。磁器陳列室が設置されたことが確認できるドイツ国内の城は、管見の限り二二件である。戦災や自然劣化により失われた作例も多いが、現存する作例も少なくない。なかでもとりわけ大規模で歴史的、政治的メッセージ性の強い磁器陳列室を設置し注目されるのは、選帝侯とその妃達であった。以下、選帝侯に関わる磁器陳列室の作例を男性、女性の例に分けて紹介した。

##### 4・1

磁器陳列室を設置したドイツの選帝侯、王として以下の五名を挙げた。

- ①ブランデンブルク選帝侯で一七〇一年にプロイセン王に昇格したフリードリッヒ一世
- ②ザクセン選帝侯でポーランド王を兼ねたフリードリッ

ヒ・アウグスト一世（通称アウグスト強王）

- ③バンベルク・マインツ教区の大司教兼選帝侯ローター・フランツ・フォン・シェーンボルン

④バイエルン選帝侯マキシミリアン二世エマニュエル

⑤ケルン大司教兼選帝侯クレメンス・アウグスト一世

これら選帝侯が設置した磁器陳列室のうち、以下の三例について豊富な画像資料をもとに陳列室の装飾およびその磁器コレクションについて解説した。

・オラニエンブルク城（ベルリン近郊）…「磁器の小部屋」

（一六九二年完成・プロイセン王フリードリッヒ一世）

・ドレスデン日本宮…磁器の城（建設一七二六―一七三三年・ザクセン選帝侯アウグスト一世）

・ミュンヘン・レジデンツ宮殿…「鏡の間」（一七三七年完

成・バイエルン選帝侯マキシミリアン二世エマニュエル）

##### 4・2

磁器陳列室を設置したドイツの主な選帝侯妃、王妃として以下の四名を挙げた。

- ①ブランデンブルク選帝侯妃ルイーゼ・ヘンリエッテ・ファン・オラニエ・ナッサウ
- ②プロイセン王妃ゾフィー・シャルロッテ・フォン・ハ

ノーファアー

③プロイセン王妃ゾフィー・ドロテア・フォン・ハノーファー

④ハノーファー選帝侯妃ゾフィー・フォン・デア・ファルツ

妃達が設置した磁器陳列室に関しては、選帝侯妃の例を中心に以下の四例について豊富な画像資料をもとに陳列室の装飾およびその磁器コレクションについて解説した。

- ・オラニエンブルク城（ベルリン近郊）：「古い磁器の小部屋」（一六六三年完成・ブランデンブルク選帝侯妃ルイーゼ・ヘンリエッテ・ファン・オラニエーナッサウ）
- ・シャルロットテンブルク城（ベルリン中心部）：「磁器の小部屋」（一七〇六年完成・プロイセン王妃ゾフィー・シャルロッテ・フォン・ハノーファー↓プロイセン王フリードリッヒ三世）
- ・モンビジュー城（ベルリン中心部）：「磁器の城」（一八世紀中頃完成・プロイセン王妃ゾフィー・ドロテア・フォン・ハノーファー）
- ・アルテンブルク城：「鏡の間」（一七三五年完成・ザクセ

ンリゴーターアルテンブルク公爵妃マгдаレーナ・アウグステ・フォン・アンハルトツェルプスト）

## まとめ

西洋における絶対王政下の美術政策のなかで、伊万里焼は、壮麗な宮殿建築の内部を装飾する美術として用いられた。磁器陳列室の成立は、磁器という素材の権威表象機能に起因するものであり、伊万里焼の収集や陳列は、政治性に根差した文化である。なかでもドイツでは選帝侯やその妃たちは、その身分に相応しい絶大な権威と財力を証明する必要があるにかられていた。伊万里焼の流行は、やがてその周辺諸国の王侯貴族やブルジョワ達をも取り込んでいく。長崎から広大な海を越えて膨大な数の磁器が運ばれた最大の要因は、王侯貴族達の住まいの装飾にあつたと思われる。鎖国とも称された江戸期にも海の向こうでは、日本の美術が壮麗なる宮殿の内部装飾と渾然一体となり、宮廷の権威を象徴する誉れに輝いていたのである。

## ■日本研究所活動報告（二〇一八年度）

### 〔1〕講演会

#### ①主催

二〇一八年一月一日五日開催

「明治一五〇年 神田佐野文庫公開記念 洋学貴重資料にみる絵と言葉―江戸から明治へ」

松田清（本学日本研究所客員教授、京都大学名誉教授）

二〇一八年二月一日四日開催

「ドイツにおける伊万里焼の収集と磁器陳列室の流行―神聖ローマ帝国諸侯の事例」

櫻庭美咲（本学日本研究所専任講師）

#### ②共催

二〇一八年六月二〇日開催（公益財団法人ボークラ伝統文化振興財団・株式会社ヒストリーデザイン共催）

「次世代に伝統文化を引き継ぐための方法論―伝統文化の活用を考える」

フアシリテーター

久保健治（本学非常勤講師、株式会社ヒストリーデザイン代表）

講師 小岩秀太郎（公益財団法人全日本郷土芸能協会理事、縦糸横糸合同会社代表）、土田宏成（本学外国語学部国際コミュニケーション学科教授、日本研究所所長）

#### ③後援

二〇一八年九月八日開催（首都圏形成史研究会主催、公益財団法人土木学会土木史研究委員会・岩井田資料研究会共催）

「首都圏の災害史研究の現在」

報告 土田宏成、谷口裕信（皇學館大學准教授）、濱千代早由美（帝塚山大学非常勤講師）、土井祥子（東京大学大学院工学系研究科）

コメント 鈴木淳（東京大学大学院教授）、諸井孝文（株式会社開発設計コンサルタンツ）

司会 吉田律人（横浜開港資料館調査研究員）

### 〔2〕「神田佐野文庫」プロジェクト

#### ①展示（洋学貴重資料展）

二〇一八年一月一日―一六日開催 本学附属図書館主催

「明治一五〇年 神田佐野文庫公開記念 洋学貴重資料にみる絵と言葉―江戸から明治へ」

監修 松田清

#### ②共同研究

・「日本広東学習新語書」の研究

松田清、矢放昭文（大阪大学言語文化研究科招聘研究員）、山村敏江（本学日本研究所客員研究員）

・「彩色ジャワ植物図譜」の研究

松田清、永益英俊（京都大学総合博物館教授）、山崎剛史（山階鳥類研究所自然誌研究室室長）、益満まを（花園大学文学部非常勤講師）、前田伸人（本学外国語学部

イペロアメリカ言語学科准教授）

〔3〕『英語で発信！ JAPANガイドブック』

二〇一八年四月刊行